

卒業生のみなさんへ

本日、東京家政学院大学は卒業生 367 名に学士号を授与しました。
卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。ご家族、関係者のみなさん、おめでとうございます。

卒業式はみなさんとそのご家族、関係者にとって大切な節目ですが、新型コロナウイルス感染者増加を前に、残念ながら、一堂に会する卒業の式典は中止せざるを得ないと判断しました。

しかし、緊急事態へのこのような対応は、みなさんのこれからの人生にも起こり得る、職業生活や家庭においても今後経験することだろうと思います。その意味で、みなさんに直接卒業のお祝いをお伝えできないのは誠に残念ですが、新型コロナウイルスが引き起こしている現在の事態からも、出来るだけ多くを学び取って本学を卒業していただきたいと願っています。

緊急事態に直面した際、あるいは予想される場合、事態が展開する中で私たちは何を考え、判断し、どう決断するのか？迅速に適切な決断が出来る、そこにひとの本性や持っている「力」が示される、みなさんはそうした経験をこれから繰り返すこととなります。

現在がそうであるように、あるいはもっと切迫した中で、人々が刻々と変わる事態を前に決断を迫られた、そうした経験をわたしたちは共有しています。「3・11」、2011年3月11日に発生した「東日本大震災」と福島第一原子力発電所事故がそうです。国外の例で言うと、2014年4月16日に発生し、高校生を含む多くの犠牲者を出した大韓民国セウォル号の沈没事故も記憶に強く残っています。

「3・11」は日本のいたるところで、震災後にも多くの難しい事態を生起させました。その中から、ひとつの小さな企業が取った行動についてお話しします。

岩手県陸前高田市にある創業 1807 年という八木澤商店は、味噌、醤油の専門メーカーとして「生揚醤油」や「おらほの味噌」といった製品で消費者の支持を得ていました。

ご承知のように、陸前高田は「3・11」で壊滅的打撃を受けた地域であり、津波が引いた後八木澤商店に残されたのは瓦礫の山でした。その様子を観た同店八代目の社長・河野和義氏は「もう終わり」と思ったそうです。

「陸前高田は全滅しました。さっき、テレビの映像を見ましたが、私の家も、会社も…なくなりました。もう終わりです。」*1

震災時東京にいて、4日目に地元によく帰れた社長は、奥様に言われたと語っています。「お父さん、見に行ったら何もないよ。真っ白いキャンパスを渡されたようなものだから、若い人たちと相談しながら、新しい絵を描いていきなさい。」*2

どのような「新しい絵」を描いたのか。お話しするエピソードは『美味しんぼ（第 108）』（2012 年、小学館）でも描かれているので、知っている方もいるでしょう。

八木澤商店の「新しい絵」は、社員が救援物資を「家が残った」人々に届ける、その際に社長から「『200 年の御礼だ、配ってこい』と言われました」から始められます。「200 年の御礼」というのは、創業 1807 年から地元で愛されて来たから、という意味です。

しかし、八代目社長和義氏は「全てを失った」会社を再建できるとは思っていなかったそうです。それを「やろう」と言ったのは九代目社長となる子息の通洋氏でした。

といっても特別損失を計上し、債務超過に陥った会社にとって再建が絶望的なことになりありません。通洋氏が取った方法は、いわば「老舗ののれん」を捨て、他社製品を自社ブランドで売って社員の雇用を守ることでした。*3

和義氏は、「この町の会社は廃業や解雇という言葉ばかりだが、うちは誰一人解雇しない。新入社員にも入ってもらおう」と通洋氏に言われたそうです。

八木澤商店にはちょうど4月に入社予定の二人の若者がいました。震災前に採用内定を出した二人の若者をどうするのか。今、みなさんの前で進行している事態同様、多くの場合「内定取り消し」に動くのがビジネスの常識かも知れません。しかし、八木澤商店はそうはしなかった。通洋氏は、後に「もともと小さな会社で、残ったのは『人だけ』です。でも、その『人』がいなかったら、八木澤商店を再建することは、不可能です」*4

そうして2011年4月7日に「ガレキの中の入社式」が行われます。

このエピソードから、私がみなさんに伝えたいこと。それは老舗醤油・味噌会社の九代目が言う「歴史ある建物だとか、微生物をコントロールしてきた木桶だとか、『あぐらをかけるもの』がなくなっただけ」にある「あぐらをかけるもの」がなくなったとき、私たちには何が残るのか、を社会の中で考え続けて欲しいということです。

本学の創設者大江スミは、1945年3月の東京空襲で麹町にある校舎、学寮が消失した際、「校舎は焼けても、また作ることが出来る。人の命は作ることが出来ません。私はこのお嬢さん方を無事に親御さんの許へ返すことが出来る、こんな嬉しいことはない」と語ったそうです。*5

時代を超えたこのふたつのエピソードは、私たちが本当に大切にすべきものが何かを語っています。本学で「家政学」という「生命（いのち）のつながり」を対象とする学問領域を学んだみなさんだからこそ、厳しい状況に遭遇しても、「私自身のあり方」を求め続けていただきたいと願っています。

卒業生、修了生のみなさん、あらためてご卒業おめでとうございます。

*1 篠原「ニュースを斬る・地震」（「日経ビジネス・オンライン」、2011年3月15日）

*2 「東日本大震災の地域農業の復興」（2017年、164ページ）

*3 「“3.11”を忘れない⑫」（岩手朝日テレビ、2011年10月10日放送）

*4 「東北の仕事論」（「ほぼ日刊イトイ新聞」、2011年9月26日）

*5 東京家政学院光塩編『大江スミ先生』（1978年、260ページ）

2020年（令和2年）3月19日

東京家政学院大学学長

廣江 彰